

論文

創生期国士館の群像

—福岡県人脈と渋沢栄一を中心に—

原口 大輔



はじめに

一九二七（昭和二）年三月二二日午後二時、世田谷にある国士館講堂で野田卯太郎の追悼会が開催された。^①発起人には、田中義一立憲政友会総裁をはじめ、若槻礼次郎憲政会総裁、床次竹二郎政友本党総裁、徳川家達貴族院議長、粕谷義三衆議院議長、牧野伸顕内大臣、一木喜徳郎宮内大臣、倉富勇三郎枢密院議長、黒田長成、清浦奎吾、後藤新平、渋沢栄一、高橋是清、犬養毅、鎌田栄吉、頭山満など、政財界の名士が連なった。追悼文は田中、若槻、床次、粕谷に加え、会場を捧げた柴田徳次郎国士館館長が読み上げた。柴田はその追悼文において、国士館の教員・学生は野田の「学孫」であり、その「精神方面」に多大な影響を受けたことを告げる。そして、

国士館は「俺（野田）引用者註、以下同）や頭山（満）のやうな人物を作る処」と野田が語っていたことを回想し、改めて国士館の「理想」に向かつて邁進することを誓い、野田への別れを告げた。^②そもそも野田の葬儀は、二月二六日、青山斎場で仏式により執り行われていたが、この追悼会は柴田たつての希望で開催された。柴田の野田に対する並々ならぬ想いが窺われる。

福岡県三池郡出身の野田は、立憲政友会所属の代議士として頭角を現し、原敬内閣、高橋是清内閣、加藤高明内閣で大臣を歴任した政治家である。また、野田は一九一三（大正二）年二月から一九一五年一月までの間、東洋拓殖株式会社副総裁を務めた。そのような野田を対象とする研究は、明治後期から大正期における福岡県政治史、政党を中心とした政治構造を把握する視角から進められてきた。^③近年では、野田の満蒙政策構想の検討を



1926年6月 国士館完成長老懇談会（国士館史資料室所蔵）
（前列左より頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一、徳富猪一郎、
後列左より花田大助、渡辺海旭、柴田徳次郎）

同じ、原敬政友会総裁の対米協調路線を相対化し、日露関係を重視する野田の構想が「国民生活」と密接に結び付くことを指摘し、一九二〇年代の政友会（特に田中義一）の外交政策への背景と位置付ける研究も進んでいる。⁴⁾

また、野田は「国士館の創立期において、野田卯太郎という人物は、欠くことのできない最大の支援者のひとり」と⁵⁾とされている。野田は理想に燃える同郷の柴田に対して支援を惜しまず、柴田に多くの福岡県出身者を引き合わせた。その甲斐もあって、柴田は頭山満や中野正剛、麻生大吉など、多くの福岡県出身の政財界の有力者の支援を仰ぎつつ、大民団やその私塾・国士館の運営にあっていた。

野田の追悼会に参列した渋沢栄一もまた、創立期の国士館を支援した人物のひとりとされている。特に、一九二六年六月三日、飛鳥山渋沢邸で行われた「国士館完成長老懇談会」終了後の記念写真——渋沢、頭山満、野田、徳富猪一郎、柴田、花田大助、渡辺海旭——は広く知られている。国士館創設期の重鎮たちと渋沢が収まった一葉の写真は、その知名度と相俟って渋沢が国士館の運営に熱心だったと受け取るに十分すぎるインパクトがある。確かに一九二二年以降、渋沢は財団法人国士館維持委員となっているものの、国士館との具体的な関わりについてはこれまで検討されたことはない。⁶⁾明治末に古稀を理由に実業界から引退した渋沢は、様々な公益事業を支援したことが知られているが、果して国士館とはいかなる関係だったのだろうか。

小稿は、以上のような問題関心をもとにした、創生期の国士館とそれを支える人々の動向と、そのグラデーシオンを明らかにするささやかな試みである。具体的に、(一) 国士館創生期における福岡県関係者の援助と国士館の理念について整理し、(二) ほとんど偶然に近い経緯で国士館に関わることとなった渋沢が、国士館維持委員として支援することになった背景とその位置付けについて検討する。その際、小稿では先年編まれた『国士館百年史 史料編上』を分析の中心に据え、必要に応じて他の史料も加えていく。改めて述べるまでもないが、この『史料編』では、戦前の国士館の設立、運営に関する公文書・私文書などが網羅的に収集、活字化されて利用の便が図られている。そして、広範な史料集であるがゆえに、様々な論点から国士館を分析する材料があり、小稿でもこの貴重な成果を積極的に活用する。また、『史料編』の編纂と並行して、それらの史料を検討した『国士館史研究年報 楓原』誌上の諸研究からも多くを学んでいることを付言しておく。

一 創設期の国士館と福岡県人脈

実は、野田卯太郎と柴田徳次郎の邂逅がいつだったの

か、正確な時期を示す史料は見当たらない。明治末、上京して苦学生だった柴田が牛乳配達・新聞配達などで学費を稼いでいた頃、頭山満、権藤成卿、内田良平ら福岡県出身者の紹介により野田邸を訪問したエピソードがよく知られているものの、ここで柴田が出会ったのは野田の長男である俊作であったとされる⁽⁸⁾。野田の日記にはつきりと柴田が登場するのは、それよりも少し後となる一九一五(大正四)年六月二八日であった。野田は、早稲田大学専門部卒業後「就職の途ニ上ル、其資金トシテ」柴田に金五〇円を「恵与」した⁽⁹⁾。この時、野田は東洋拓殖株式会社副総裁で、主に京城に在住しており、柴田ともそこで面会した。それゆえ、牛乳配達の時期と齟齬がある。その後、七月二二日、柴田は再び東拓に赴き野田と再会している。この後、柴田は大連の福昌公司に就職したとされるが⁽¹⁰⁾、のちに財団法人申請の際に提出される彼の経歴には、八月から翌一九一六年四月まで「朝鮮満州青島地方視察」であったと記されている⁽¹¹⁾。

ともあれ、柴田の歩む道には常に福岡県関係者の支援の手が差し伸べられており、例えば、野田は頭山満などとともに大民団顧問に就任した。また、一九一七年一月四日、麻布区筈町に大民団の私塾として国士館を創設した際も、野田は頭山や緒方竹虎などとともに発起人と

なった⁽¹³⁾。そもそも、福岡県における政友会人脈は、旧自由党系によって成り立っており、三井、麻生、貝島など筑豊の炭坑資本家と緊密な一体性を有していた。野田や同じく代議士であった永江純一はその結節点とされ、野田の参加は、大民団や国士館にとって重要な人脈となった。思想的には、野田の大陸進出構想と福岡の国権派が共鳴したものと思われる。柴田は、野田などの協力を得て、定期的に麻生大吉や安川敬一郎に寄附の依頼を行い、資金を工面していた⁽¹⁴⁾。とはいえ、大民団や国士館の活動は東京での活動が中心であり、地元で設立する育英事業や学校とは異なるものであった。そう考えると、大民団や国士館は、「旧藩」ではなく県が単位で、郷党の子弟の教育機会よりも思想や理念が先行するものであったという点で、非常に興味深い成立であったといえる⁽¹⁵⁾。

さて、柴田らが中心となって設立した私塾・国士館は、現行の学校教育を厳しく批判する立場を有していた。具体的には次の通りである。

〔前略〕今日の日本文化は猿真似の文化なり、悉く之れ西洋直訳の文化なり、其の表面を模倣せるものなり、其の弊害を識別する処なくして凡て唯だ舶来品を宗と仰ぐの文化なり。

国家の最高学府たる帝国大学は骨抜きせる奴隸的の官吏養成所なり、藩閥の走狗を養ふの地なり、かくして智識の宝庫は天下に公開されざるなり。可し公開さるゝの日ありとするも、ノート式の講義は畢竟死学のみ、其説く処高遠深遠なるが如きも、遂に之れ形式範疇のみ、何等の信念なく、誠熟なき鸚鵡の口着似のみ、人を化するの力なし。〔後略〕⁽¹⁶⁾

国士館は、東京帝国大学を筆頭とした現在の教育のあり方を画的で単調なものと見なし、その講義の実態は官僚養成の「死学」と批判する。ゆえに、国士館は、「純然たる寺子屋式」——「活学」こそあるべき教育の姿とし、「量敷の広間に講師は低い机を前にして座談を為し生徒は幾列にも端座して之を聴く、説く方には十分の熱誠あり聴く方にも緊張した熱心がある、言外尚ほ教化の及ぶものありて今日諸学校のノート式教授の様な空々しいものではない」と喧伝した⁽¹⁷⁾。

は午後七時から九時までの二時間（日曜祭日休み）の開講のみであった。これは私塾として発足する以上、夜間教育を主にすることでしか受講生を集めることができなかつたためと考えられる。

「国士」の名を冠するためか、国士館関係者は積極的

に「史実」を援用するきらいがあった。例えば、代議士でもあり、毎週月曜日に「時事及財政」を講義した長島隆二は、「現今の日本より欧洲戦争を説き、宛も日本の戦国時代に於ける本能寺の変に例へ、欧洲列国をして完膚なからしめたり、其れより米国を経済的に将又軍事上より解剖し、今後に於ける日本の財政に及ぶ約一時間の熱弁を振」うといった様子であった。⁽²⁰⁾ また、ここでの「国士」とは、長瀬鳳輔によれば、「国家或は社会の爲めに自己の利益をば犠牲に供しても意としない」と云ふやうな真に愛国的精神に満ちて居る人格者」と定義された。⁽²¹⁾ そのような国士館は、第一次大戦後の日本社会の要諦を「文教」と見定め、国家主義的な見地から「あるべき」教育を模索する。⁽²²⁾ 「徒らに凡上に講義するの腐儒、俗先生にあらず、自ら生徒に率先して道を行ひ、善美なる人間の模範を示」すことが理想とされ、⁽²³⁾ 国士館は自らを「大正維新の松陰塾たるの効果あらん」と自賛した。⁽²⁴⁾ 「松陰塾」と自称したように、国士館の吉田松陰への執着は徹底しており、一九一八年一月に開催された第一回国士祭では、世田谷の松陰神社で吉田松陰の霊を祭った。⁽²⁵⁾ さらに、国士館はその世田谷に移転し、一月九日、新築落成式を挙行した。

これに伴い、国士館も徐々に講義内容の体系化を図っ

ていった。具体的には、「訓練(修身)」、「智識(實際)」、「材料及発表」の三科に大別され、「訓練(修身)」には「思想鍛鍊」(「国体論」、「哲学概論」、「東洋思想史」、「西洋思想史」、「實際修養」)、「身体鍛鍊」(「剣道」、「柔道」、「各種体技」)が、「智識(實際)」には「経国理民(法学)」、「法学通論」、「憲法精義」、「民刑商法要義」、「国際法大要」、「軍事概略」、「実習」)、「生活指導」(「経済精義」、「社会問題」、「実習」)、「鑑古実証(歴史)」、「帝国史」、「東洋史」、「西洋史」、「外交史」)、「実行資料(科学)」、「科学要領及実習」が、「材料及発表」には「語学」(「英独仏」、「支那」、「露」、「蒙古」、「南洋」、「実習」)、「古典」(「国語」、「漢文」、「論策実習」)といった授業が構成された。⁽²⁷⁾

また、国士館は世田谷への移転に伴い、東京府を通じて文部大臣に財団法人の申請を行い認可された。⁽²⁸⁾ あわせて、柴田は国士館の事業拡大のため、財団法人設立申請前後より積極的に寄附を求めていった。⁽²⁹⁾ 具体的には、麻生太吉や麻生を介して松本健次郎や伊藤伝右衛門からの寄附を受けるなど、筑豊の炭坑資本家に対して積極的に働きかけていった。⁽³⁰⁾ もちろん、それ以外にも、井上準之助、山本達雄、堤啓次郎などの個人や、正金銀行、日本郵船会社、古河合名会社などの企業からの支援を集めることに成功していた。⁽³¹⁾ 福岡からの支援については、例え

ば柴田の洋行（一九二一年）の際、国士館会計主務で衆議院議員でもあった上塚司が麻生に旅費補助を依頼し、加えて野田の口添えもあり、堀三太郎、伊藤、中野正剛、貝島などが出資するといったこともあった。⁽³³⁾ でき得る限り人脈を活用する姿勢が窺える。

一九二一年七月、国士館は財団法人国士館維持会を設置した⁽³⁴⁾。会長には栗野慎一郎（福岡県）を据え、維持委員には、頭山満（福岡県）、野田卯太郎（福岡県）、清浦奎吾（熊本県）、金子堅太郎（福岡県）、根津嘉一郎（山梨県）、和田豊治（大分県）、大橋新太郎（新潟県）、神田鑄藏（愛知県）、小池國三（山梨県）、有賀長文（大阪府）、馬越恭平（岡山県）、浅野総一郎（富山県）、山梨半造（神奈川県）、田尻稻次郎（鹿児島県）が就任した。維持委員には福岡県出身者が大多数を占め、それ以外の委員は、実業家の名前が多く見られた。国士館がこのタイミングで維持委員を設けた理由は詳らかではないものの、規約には「国士館ノ維持金ハ一ヶ年金五万円ヲ目的トシテ之ヲ募集ス」とあるように、財団法人国士館への寄附と、その管理を取り扱うために別個に委員を設置し、同時に寄附先を明確にする目的があったものと考えられる。

さて、実業家から多くの寄附を受け、徐々に国士館の

事業を拡張していった柴田だったが、一九二四年、突如第一五回衆議院議員総選挙に出馬することとなった。この総選挙は、同年一月、清浦奎吾内閣倒閣を目指す護憲三派に対して、内閣が衆議院を解散したことによって実施されたものであった。

衆議院の解散以降、野田の日記には柴田の名前が頻繁に登場するなど、護憲三派の内情を窺いつつ、福岡県人脈を活用しながら選挙戦に臨むかどうかを検討していたものと思われる⁽³⁵⁾。そして、三月二十六日、柴田は出馬の決心を固め、大民団や国士館関係者に応援を依頼し、頭山満ら在京有志の推薦を受け、選挙戦に打って出た⁽³⁶⁾。選挙区は東京二区（麻布・赤坂）で、小選挙区制が導入された前回総選挙（一九二〇年）では、林田亀三郎（革新倶楽部）が当選した選挙区であった。柴田が立候補した理由は明らかではないが、発足以来大民団が、普通選挙問題に強い関心を有していたこと⁽³⁸⁾、また護憲三派による選挙戦が混戦となることを見越し、その間隙を縫う算段があったのではないかと推測される。

新聞報道によると、定数一の東京二区は、村松恒一郎（憲政会）、林田亀太郎、藤原俊雄（実業同志会）、田村彰一（政友本党）、柴田徳次郎（中立）の五名が立候補した。柴田は野田などの人脈もあり、また東京二区に政

友会の候補者が不在であったこと、あるいは黒龍会の後援があったため政友会系と見なされていたが、柴田自身は「中立」を標榜しており、選挙戦序盤では、前職の林田と「勢力伯仲」と報じられていた⁽³⁹⁾。しかし、政党の明瞭な後援がないこともあってか、徐々に劣勢となり、選挙戦終盤になると、柴田は「猛烈なる個別訪問」を開始し挽回を図るも、最終的に林田が二五〇六票を獲得し当選した⁽⁴⁰⁾。なお、柴田は一九〇六票で次点。以下、村松が一八九八票、藤原が六五七票、田村が四六九票であった。選挙戦における政党組織の重要性が高まっている時期に、「中立」派候補としては善戦したと評価できるが、以後、柴田は衆議院議員に立候補することはなかったようである。

二 国士館の拡張と渋沢栄一

柴田徳次郎の選挙戦より時期が遡るが、創生期の国士館において重要な人物のひとりとされる渋沢栄一が初めて国士館を訪問したのは、一九二二(大正一一)年四月二二日のことであった⁽⁴¹⁾。渋沢は、柴田の招待により館内を見学するだけの予定だったところ、柴田から急遽講堂で学生に対して演説を求められることになった。ここで

はそのような突発的な状況下、渋沢が「日常考へておる事及び本館を訪ひ感じた事」について、どのようなことを述べているかに耳を傾けてみたい。

渋沢は、国士館に到来し、強く心に響いたのは「春風駘蕩」といった気候にそぐわない、「秋風肅殺」といった「稟乎たる雄々しき気分」であったという。そして、倒幕運動に傾倒した自身の青年時代の「随分と蛮的」な時期にわずかばかり漢文を学習したことを思い出し、同時に維新以後の教育が「組織立つた秩序的に非常に進化したことと対比する。ひるがえって現在の教育とかつての教育を比較すると、それは一長一短であり、渋沢から見ると、「今日の教育が形式的に流れ、教育そのもの、精神と云ふ事に欠いておる」ことを問題視した。それゆえ、国士館は「私等日頃の念願が実現されたもの」であると讃え、その「精神教育」を評価し、乃木神社・松陰神社に囲まれるというロケーションも含め、国士館の今後に期待を込めた。「今日はそう云ふ積りでなかつたのですから、何等の用意準備もありません」といったごとく、いささか具体性に乏しい渋沢の演説だが、自身の来し方と現状の教育のあり方に対する何かしらの不満と、それを対置する国士館の教育のあり方に期待を込めている——多分にリップサービスもあるが——ことが窺え

る。すなわち、丁寧な言葉で語る渋沢の教育に対する私見は、言辞は激烈で、一で先述した国士館の画一的な教育批判と一致する部分でもあった。ただし、史料的な裏付けはないが、渋沢がかかる観点から国士館を称揚することができたのは、柴田から館内の案内を受けた際に聞いた話がベースとなっているのだろう。

国士館の訪問と演説後、正確な日時は不明ながらも、渋沢は維持委員となることを承諾し、その事業を支援するに至った。⁽⁴⁸⁾ その支援をもう少し具体的に説明すると、渋沢は、一九二二年より単年度二〇〇〇円の維持金を五年継続で合計一万円支払うこととなった。その当時、維持委員だった麻生太吉、和田豊治、馬越恭平などが単年度一〇〇〇円で五年継続だったことを鑑みれば、渋沢はかなりの出資である。⁽⁴⁹⁾ 当時、様々な公益事業に賛同し、出資していた渋沢の協力を得ることは、事業の維持・拡張を絶えず続けていかねばならぬ柴田にとって極めて重要な課題であったと思われる。渋沢が維持委員を承諾した理由も詳らかではないが、訪問時の演説で述べたごとく、現状の教育への不満とそれに対する国士館の教育のあり方に賛同したと考えるほかはない。渋沢はひとたび就任した以上、野田邸で開催される維持委員会にも顔を出していた。⁽⁵⁰⁾

しかしながら、渋沢はやはり国士館の思想や運営方針に対してどことなく釈然としない感じを有していたようである。くだんの「国士館完成長老懇談会」の開催にあたっては、渋沢が、「世田ヶ谷国士館の義に付ては、何分にも中途より参加致候事として事情を承知不致」、しかし柴田から国士館拡張のため寄附の依頼があったので、渋沢の飛鳥山邸で柴田ほか数名と意見交換したい、と申し出たことが直接のきっかけであった。一九二六年六月三日、懇談会に参加したのは、渋沢、頭山満、野田、徳富猪一郎、柴田、花田大助、渡辺海旭で、栗野慎一郎と上塚司は欠席した。⁽⁵¹⁾ ここでは、国士館の経営状態と事業の現況、将来設計の確認が主であり、終了後、記念撮影を行った。

渋沢は自ら確認して納得したのであろう、国士館維持委員として支援を続けていく。一九二六年一月四日に開催された国士館創立一〇年祭では、渋沢は「一場ノ意見」と「頃日記載せし一幅ノ博学之云々ノ趣旨ヲ講義的二演説」した。⁽⁵²⁾ その具体的な内容は、同月二五日に開催された維持委員会での次のような発言から窺える。

私等は、昔の漢学塾で学んだ者であり、学んだと云つても大した学んだと云ふ程の学問もありは致しま

せぬが、何だか、今の画一教育では真の人物は出さうにも思はれぬし、賛成はしかねるので、何とか仕様はないものかとかね／＼考へて居つた処に、国士館を知つて、こう云ふ風に教育したら確に良いと感じましたので〔後略〕⁵²

すなわち、渋沢は「画一教育」への批判から国士館に期待したのである。それは初めて国士館を訪問した際、演説した内容と同様であつた。

一方、この日の維持委員会において、柴田は、「如何にも、高等・専門の学生が非愛国的であり、近眼鏡に肉のそげた青い顔でとぼ／＼と無気力で歩く風は、世界何処の大学生にも見る事の出来ぬ凶でありまして、且つ共産学生事件も、表れたのは腫物に膏藥張つた様なもので、体内の毒を一掃する根本の手術は少しも施されて居りませぬ⁵³」と述べ、他校で学ぶ学生の「左傾化」に強い危機感を有していた。同じく上塚も、「今日の時世は、〔中略〕政界は醜悪なる党争を繰返して国家あるを忘れて居ります。帝国の最高学府並専門学校の教育は日本精神を没却して、不軌を図るの逆徒をすら出して居ります、小作争議・労働争議は随所に起り社会思想は益々悪化の情勢を示し、各方面とも、混沌たり、雑然たるの有様でありま

す。〔中略〕国士館の如き学校が一日も速に完成せられ、其の精神を奉ずる、正しく強き卒業生があらゆる階級、あらゆる方面に突入して、活躍するの必要痛切なるを感じるからであります⁵⁴」と、政党の醜聞と階級闘争の激化に伴う社会の不安定化を嘆いていた。両者に共通するのは、既存の学校制度で学ぶ若者への不満である。しかし、このような意見に対して、渋沢ほどの程度同意していたのかは不明だが、少なくとも何かしらの意見を挟むことはなかつた。

現行教育への不満に端を発する国士館への期待については共通する部分があつたものの、このような国家主義的で激しい思想を有する国士館の幹部と、国内外で様々な公益事業に参画していた渋沢との間に少なからぬ距離があつたことは容易に想像される。この時期、渋沢は「民間外交」を推し進めており、例えば、一九二一年一月から始まつたワシントン会議でも、全権団を側面から支援するため、実業家とともに渡米していた。特に、渋沢は旧藩主筋にあたる全権・徳川家達の動向を気にかけていた。しかし、家達が海軍軍縮に関する不規則発言によつて国内の強硬派から強い批判を浴びることとなり、渋沢もその対応に苦慮することとなつた。家達は、会議の成功と対米英協調の観点から日本の海軍主力艦の比率を対

米英六割と主張していたものの、国内強硬派からは、それでは著しく海軍の軍事力に差が出ると論難されたのである。そして、その批判の急先鋒だったのが、国士館で教鞭をふるう中野正剛であり、永井柳太郎であった。⁽⁵⁵⁾

そういう観点から見ると、渋沢は国士館に対して十分な支援を行う義理などさほどないようにも思える。実際、渋沢が国士館について言及する時、その国家主義的な思想に対して賛同するような発言はなかった。しかし、繰り返しになるが、国士館について語る渋沢の中で一貫していたのは、画一的な現行の学校教育への問題意識であった。⁽⁵⁶⁾ すなわち、渋沢は様々な学修や生徒の修学のあるり方——学修の多様化——を担保し、支援することが必要と思考していたのだろう。それは、渋沢の「フィランソロピー」の一形態であったと思われる。近年、研究が進められている渋沢の「フィランソロピー」活動に関して、「渋沢は、明治以降急速に導入されていった欧米の文明・文化と、儒教、神道、仏教などの旧来の文化とどのように調和させるかを課題のひとつと考えていた」と評されており、国士館の維持委員に参加したこともそのひとつの手立てではないかと推測される。

維持委員における渋沢の独特な位置は、ほかの維持委員や国士館から支援を求められた実業家にとっても重要

であった。例えば、維持委員会長の栗野慎一郎は、渋沢に對して、「野生国士館トノ關係ハ御承知之如ク、維持委員会會長トシテ主トシテ有志諸君より寄附セラレタル金員之保管并ニ其使途監督之任務ヲ尽スニ止リ、館務上之件ニ付テハ親數關係シ居ラサル義ニ付、此趣旨は閣下ニ於テモ同館御賛助之御一人トシテ御承知置願度存シ候⁽⁵⁷⁾」と書き送っていた。栗野も福岡県出身ということもあり、維持委員会長として国士館に携わっているものの、あくまで栗野自身は寄附金の「保管」と「監督」に留まるものであつて、国士館の運営や思想面については「親數關係」ではないと渋沢に伝えていたのである。栗野にとって、渋沢はその思いを打ち明けることのできる相手と認識していたことは、国士館に関わる渋沢の位置を考えるうえでも興味深い。

また、国士館は渋沢を介して大倉喜七郎に援助を仰いでいた。それに対して、大倉は自身が有する「四庫全書」とそれを収蔵する書庫の寄贈を行うことを決めるも、「物質的之御援助は致し兼候」と距離を置く姿勢を貫いていた。⁽⁵⁸⁾ 渋沢を介することで国士館は大倉からの援助を期待することができる一方、大倉から見れば、思想的な面では国士館と必ずしも符号しない渋沢からの依頼であるがゆえに、渋沢がある種の防波堤として距離を置くことが

できたのである。

おわりに

以上、ラフスケッチではあったものの、小稿では創設期の国士館の理念とそれを支える人々について、その中枢を担った野田卯太郎などの福岡県人脈と、後から維持委員として参与することとなった渋沢栄一について検討を進めてきた。小稿を閉じるにあたり、その内容を改めて整理していく。

野田を中心とした福岡県出身者に支えられた大民団、そして創生期の国士館は、その運営に携わる人物もその人脈が色濃く表れていた。柴田徳次郎の言葉を借りれば、野田は、「後進を引き立つると云ふことに就いて、人は後方から押しやることは出来るが、前方から手を引いてはやれぬ⁽⁶⁰⁾」といった考えを有していた。国士館の舵取りを担った柴田は、その事業を維持し、拡張させるため、野田をはじめとする人脈を活用し、時に断られることもあったが、麻生や貝島といった福岡の実業家に寄附を頼み続けた。また、同じく同県の誼であるう、旧居留米藩主家の有馬頼寧が国士館で「社会問題」を講じたこともあった⁽⁶¹⁾。戦前の国士館の受講生、入学者の出身地などが

判明する史料が見当たらないのが残念ではあるが、国士館の運営は「地元」の政財界の名士に支えられた一方、「地元」に設置する私塾や学校とは異なるため、受講生や生徒の募集にあたっては、現行の教育に対する批判や理想を押し出したことが優先された。もちろん、国士館も手を拱いて受験生を待つだけでなく、地方出身の生徒募集や受験の便を図るために九州での「出張試験」が計画されるなど⁽⁶²⁾、ともすれば現代の大学入試のそれを彷彿とさせるような試行もあった。

国士館の「国士」理念は、帝国大学を頂点とする大正期の教育や社会思想に対する強烈なアンチテーゼを内包した国家主義的なものであり、自らを「松陰塾」と位置付けることによって国家の変革を担う人材の育成を目指したものであった。それは麻布区筭町から、松陰神社、乃木神社、井伊家菩提寺である豪徳寺、桂太郎の墓地に囲まれた世田谷——渋沢栄一の言葉を借りれば、「自然美」と「人情美」の中——に移転したことから窺える。加えて、世田谷に移った国士館は、大民団が運営する購買組合を組織して「理想田園都市」を造成する計画を立てており、実際、入学した生徒の多数は自治を謳う寄宿舎に入寮していた⁽⁶³⁾。すなわち、国士館は私塾としての限界に早々に気付き、それを克服するために、中等部から

大学へと一貫した教育を施し、同時にいわゆる「大学町」^⑥を世田谷に築くことを目標のひとつとしていた。そうすることで、既存の学校制度と一線を画した教育を行い、その理念を具現化させることができると考えたわけである。

しかし、当然のことながら、郷党や理念だけを頼りに国士館を發展させることは難しい。その下支えとなる資金は問題として常に離れることはなかった。ゆえに、柴田はこれまでの人脈からさらに支援の輪を拡げられることを目指していく。その象徴となったのが洪沢栄一であった。

洪沢は、一九二二年（大正一一）より国士館の支援を始めるものの、あくまで維持委員に留まり、財団法人国士館の役員とはならなかった。「誠意、勤労、見識、気魄が一つに練り合ったものが、即ち殉国の精神である」と、よりナシヨナリズムに特化した言説を放ち始める柴田を横目に、洪沢はその政治思想に対して距離を置き、それに対して何かしら言及することはなかった。

ただし、洪沢は当該期の「画一教育」に対する批判とその克服という点では国士館の教育方針に一致していた。それゆえ、洪沢が国士館について語る際、常にその問題のみが取り上げられることとなった。かかる文脈から洪沢は維持委員として国士館の教育を支援することと

なる。一度関与した以上、そのあたりが洪沢にとつての落としどころだった^⑦。先述した有馬も、柴田から依頼のあった国士館の維持委員就任を「名義だけなら承諾^⑧」としたのも類似の事例だったのかもしれない。国士館の周縁部に位置する洪沢の存在は、その内外から関わる栗野慎一郎や大倉喜七郎にとつて緩衝材でもあった。

当然のことながら、ある団体の運営に参与する人々の全てが同じ思想、理念、方向性を有しているわけではない。国士館のそれを考えるうえで、柴田を背後から支え、運営の中心にいた野田と、必ずしも諸手を挙げて国士館の方針に賛同するわけではなく、しかし現状の教育へのあり方への疑問という共通の関心を有した洪沢を分析する小稿は、そのような点を考えるひとつの試みであった。とはいえ、読者からしてみれば、ほかの人物と国士館の関係はどうなのかといった疑問がすぐさま浮かんでこよう。その検討は、『史料編』のさらなる検討と、新たな史料発掘との並行によって深められていくに違いない。小稿がそのような分析を進めるうえでひとつの試論となることを祈りつつ、ひとまずこの小文を終えることにする。

一註

- (1) 坂口二郎編『野田大塊伝』（野田大塊伝刊行会、一九二九年）八五九～八六一頁。
- (2) 同前、八六四～八六九頁。
- (3) 代表的な研究として、有馬学「東拓時代の野田卯太郎」（西南地域史研究会編『西南地域の史的展開 近代篇』思文閣出版、一九八八年）、季武嘉也『大正期の政治構造』（吉川弘文館、一九九八年）を挙げておく。
- (4) 久保田裕次「満蒙政策と政友会―大正期における野田卯太郎と山本条太郎―」（『日本史研究』第六六六号、二〇一八年）。
- (5) 熊本好宏「野田卯太郎（大塊）」（『国士館史研究年報 楓原』第二号、二〇一一年）二二三頁。
- (6) 渋沢に関する研究は多岐にわたるが、近年の渋沢栄一の評伝などに目を通して、国士館について言及されることはない。代表的なものとして、土屋喬雄『渋沢栄一』（吉川弘文館、一九八九年）、木村昌人『渋沢栄一―民間経済外交の創設者―』（中央公論社、一九九一年）、島田昌和『渋沢栄一―社会企業家の先駆者―』（岩波書店、二〇一一年）、井上潤『渋沢栄一―近代日本社会の創造者―』（山川出版社、二〇一二年）など。その理由のひとつに、渋沢はその後半生において、濃淡の差はあれ、数多の公益事業を支援しており、それらを過不足なく評伝の叙述に挿入することは極めて難しいからと考えられる。この点に関しては、後掲註（57）を参照のこと。
- (7) 国士館百年史編纂委員会専門委員会編『国士館百年史 史料編上』（学校法人国士館、二〇一五年）。
- (8) 『道辺の草（柴田徳次郎自伝）』（一九一七年一月一日）、前掲『国士館百年史 史料編上』六六～七一頁。前掲熊本「野田卯太郎（大塊）」では、一九〇五（明治三八）年に柴田が上京し、苦学しながら学校に通った頃の思い出としている（二一五頁）。
- (9) 『日記』（九州歴史資料館所蔵「野田大塊文書」）、一九一五年六月二八日条。以下、「野田日記」と表記する。
- (10) 『野田日記』、一九一五年七月二二日条。
- (11) 『ブックレット 国士館一〇〇年のあゆみ』（学校法人国士館、二〇一七年）二～三頁。
- (12) 『中学校設置認可申請書』（一九二五年三月三〇日）、前掲『国士館百年史 史料編上』三三二頁。
- (13) 『青年大民団名簿』（『大民』第二巻第七号、一九一七年七月一日）、前掲『国士館百年史 史料編上』

二九頁。大民団成立の経緯、さらにその活動の概要については、佐々博雄「大民団と国士館」雑誌『大民』からみえるもの」（前掲『国士館史研究年報 楓原』第二号）が有益である。

(14) 前掲有馬「東拓時代の野田卯太郎」、六四一頁。

(15) 例えば、「麻生大吉宛柴田徳次郎書簡」（一九一七年一月七日）、「麻生大吉宛柴田徳次郎書簡」（一九一八年四月二五日）、前掲『国士館百年史 史料編上』一〇八〜一〇九頁など。

(16) これは、大名華族や士族などが主体となって旧藩地域に設置する学校や、旧藩主体の育英事業との対比を念頭に置いている。例えば、天野郁夫『学歴の社会史―教育と日本の近代―』（新潮社、一九九二年）、菅原亮芳『明治期民間育英奨学事業史の一断面』（『地方教育史研究』第一四号、一九九三年）、中川言美『防長教育会の設立過程における「教育授産」の理念』（『教育学研究紀要』第三七巻、一九九二年）、同「島津奨学資金による育英事業の成立と展開―財団法人認可後を中心に―」（『教育学研究紀要』第四〇巻、一九九五年）、永添祥多『長州閥の教育戦略―近代日本の進学教育の黎明―』（九州大学出版会、二〇〇六年）、布施賢治「旧山形藩士族が設立した霞城

育英会について―近代山形県に旧藩を母体として設立された育英事業の検討―」、同「育英事業と人材観―最上育英会と旧藩意識・士族意識・実業との関係から―」（『米沢史学』第二五号、二〇〇九年）、真辺将之『西村茂樹研究―明治啓蒙思想と国民道徳論―』（思文閣出版、二〇一〇年）、藤方博之「明治期佐倉における旧藩主堀田家の活動―教育・産業分野を中心に―」（『地方教育史研究』第三四号、二〇一三年）、内山一幸「明治期の旧藩主家と社会―華士族と地方の近代化―」（吉川弘文館、二〇一五年）、友田昌宏「明治期における旧藩君臣関係の諸相」（『歴史』第一二六号、二〇一六年）、「近世・近代移行期における藩主像の変容と君臣関係」（『歴史評論』第八〇三号、二〇一七年）、宮間純一「小藩」における旧藩の社会的結合」（松尾正人編『近代日本成立期の研究 地域編』岩田書院、二〇一八年）、原口大輔「明治期の静岡育英会―徳川宗家・旧幕臣・旧静岡藩―」（『渋沢研究』第三一号、二〇一九年）など。

(17) 「宣言 活学を講ず」（『大民』第二巻第一一〇号、一九一七年一月一日）、前掲『国士館百年史 史料編上』八三頁。

- (18)「寺子屋時代の国士館」(『大民』第五卷第一号、一九一九年一〇月二〇日)、前掲『国士館百年史 史料編上』九〇頁。
- (19) 同前。
- (20)「国士館開校式」(『大民』第二卷第一二号、一九一七年二月一日)、前掲『国士館百年史 史料編上』八九頁。
- (21)「国士館の主旨及本領(長瀬鳳輔開館式演説)」(『大民』第五卷第三号、一九一九年二月一日)、前掲『国士館百年史 史料編上』一五六頁。
- (22)「国家の大本は文教に在り」(『大民』第五卷第一号、一九一九年一〇月二〇日)、前掲『国士館百年史 史料編上』九一〜九四頁。このような私塾・国士館の性格を検討したものととして、平崎真右「国士館の設立とその時代―私塾、大正、活学の系譜―」(『国士館史研究年報 楓原』第九号、二〇一八年)。
- (23)花田大助「吉田松陰の為人に就て」(『大民』第三卷第一号、一九一八年一月一日)、前掲『国士館百年史 史料編上』一六六頁。
- (24)「国士館設立趣旨」(一九一七年一月)、前掲『国士館百年史 史料編上』八五頁。
- (25)佐々博雄「国士館創立と吉田松陰」(『国士館史研究年報 楓原』第六号、二〇一五年)、熊本好宏「国士館と松陰」、勝田政治「松陰はどのようにとらえられてきたか」(『国士館人文学』第四九号、二〇一七年)など。勝田は大正期において吉田松陰が「国士」と評されたことに着目し、吉田と国士館との深い縁を見出している。
- (26)「偉人の霊我を導く」(『大民』第五卷第一号、一九一九年一〇月二〇日)、前掲『国士館百年史 史料編上』一一七頁。
- (27)「国士館規則書(抄)」(一九一九年一月)、前掲『国士館百年史 史料編上』一七四〜一七五頁。
- (28)「財団法人国士館設立許可申請書(東京府控)」(一九一九年一〇月六日)、「財団法人国士館設立認可書(写)」(一九一九年一月七日)、前掲『国士館百年史 史料編上』一四四〜一四八頁。
- (29)例えば、「麻生太吉宛柴田徳次郎書簡」(一九一九年一〇月二三日)、前掲『国士館百年史 史料編上』一六四〜一六五頁。
- (30)例えば、「麻生太吉宛柴田徳次郎書簡」(一九二〇年七月二六日)、前掲『国士館百年史 史料編上』一六九頁。
- (31)「大正八年度予算(付大正八年度賛助者芳名)」(一

- 九一九年)、前掲『国士館百年史 史料編上』一六〇～一六一頁。
- (32) 麻生太吉日記編纂委員会編『麻生太吉日記 第二卷』(九州大学出版会、二〇一二年) 一九二二年九月九日条。
- (33) 同前、一九二二年一〇月三日条。
- (34) 「財団法人国士館維持会規約」(一九二二年七月)、前掲『国士館百年史 史料編上』二四〇～二四二頁。
- (35) 例えば、「野田日記」、一九二四年二月四、九、二〇、二五、二八日条、三月一二、一三、一五、一九、二一、二三日条など。ただし、「野田日記」には「柴田」と名前のみが記されているため、そこで何が話し合われたのかは不明である。
- (36) 「洪沢栄一宛国士館書簡」(一九二四年三月三〇日)、前掲『国士館百年史 史料編上』九〇六頁、「大正一三年森俊蔵懐中日記」(一九二四年三月二六日条)、前掲『国士館百年史 史料編上』九〇六～九〇七頁。
- (37) 前掲「洪沢栄一宛国士館書簡」(一九二四年三月三〇日)、「柴田徳次郎評「国士養成に専心する」」(一九二八年二月一五日)、前掲『国士館百年史 史料編上』八一、九〇六頁。
- (38) 大民団と普選問題については、前掲佐々「大民団と国士館」、一四～一六頁を参照。
- (39) 「東京各区の乱戦 激戦地帯の江東方面(上)」(『東京朝日新聞』一九二四年四月一五日付朝刊) 二頁。
- (40) 「激戦状態に入った東京の総選挙戦(二)」(『東京朝日新聞』一九二四年五月五日付夕刊) 一頁。
- (41) 「一段と活気づいた市内の激戦地」(『東京朝日新聞』一九二四年五月七日付夕刊) 一頁。
- (42) 「東京市の白兵戦」(『東京朝日新聞』一九二四年五月八日付朝刊) 二頁。
- (43) 「各市部開票」(『東京朝日新聞』一九二四年五月二日付朝刊) 二頁。
- (44) 「国士館生諸君に(洪沢栄一講演記録)」(一九二二年四月二二日)、前掲『国士館百年史 史料編上』二四一～二四三頁。この洪沢の演説は『大民』第八卷第六号(一九二二年六月一日)と『竜門雜誌』第四一一号(一九二二年)に掲載された。
- (45) 「麻生太吉宛柴田徳次郎書簡」(一九二二年六月二八日)、前掲『国士館百年史 史料編上』二四六～二四七頁。また「集會日時通知表」(洪沢青淵記念財団竜門社編『洪沢栄一伝記資料』第四六卷、洪沢栄一伝記資料刊行会、一九六二年 六二～六三頁)にも洪沢が国士館維持委員会に参加した記録が残され

ている。

六六頁。

- (46) 「麻生太吉宛柴田・上塚連名書簡」(一九二二年六月九日)、前掲『国士館百年史 史料編上』二四五～二四六頁。なお、維持金が五ヶ年間の寄附となっているのは、維持会の規約(「維持金ハ一口金壹百円トスル五ヶ年間ノ寄附トス」)に拠ったものである。前掲「財団法人国士館維持会規約」、『国士館百年史 史料編上』二四〇頁。
- (47) 例えば、「野田日記」、一九二二年六月三日条、一月二四日条など。
- (48) 一九二六年五月二七日付栗野慎一郎他三名宛渋沢栄一書簡控(前掲『渋沢栄一伝記資料』第四六卷)六三～六四頁。
- (49) 「国士館書類 国士館完成長老懇談会経過」(前掲『渋沢栄一伝記資料』第四六卷)六四～六五頁。この時参加した渡辺海旭と国士館との関係については、漆畑真紀子「渡辺海旭」(『国士館史研究年報 楓原』第三号、二〇一二年)、菊池結「教育の「土台」としての宗教・文化―渡辺海旭から、柴田徳次郎および長谷川良信に受け継がれたもの―」(『国士館史研究年報 楓原』第八号、二〇一七年)を参照。
- (50) 「国士館書類」(前掲『渋沢栄一伝記資料』第四六卷)
- (51) 「国士館書類 維持委員会経過概要」(前掲『渋沢栄一伝記資料』第四六卷)七三頁。
- (52) 同前、七四頁。
- (53) 同前、七六頁。
- (54) 前掲木村『渋沢栄一』、酒井一臣『帝国日本の外交と民主主義』(吉川弘文館、二〇一八年)などを参照。
- (55) 原口大輔「貴族院議長・徳川家達と明治立憲制」(吉田書店、二〇一八年)第四章、前掲『国士館規則書』(一九一九年一月)、『国士館百年史 史料編上』一七三頁。
- (56) ただし、大学教育を画一的な官僚養成機構と見做して批判しながらも、当時問題としてよく取り上げられていた「法科偏重」批判などに立ち入った議論などは行われていなかったようである。「法科偏重」批判については、若月剛史『戦前日本の政党内閣と官僚制』(東京大学出版会、二〇一四年)を参照。
- (57) 見城悌治・飯森明子・井上潤「シリーズ出版『渋沢栄一と「フィランソロピー」』(全八巻)刊行にあたって」(町泉寿郎編『渋沢栄一は漢学とどう関わったか―「論語と算盤」が出会う東アジアの近代―』ミネルヴァ書房、二〇一七年) ii頁。ここで使用され

る「フィランソロピー」とは、キリスト教と繋がりが深いアメリカのフィランソロピーやイギリスのチャリティとは異なり、宗教に基づいていない渋沢の慈善活動を把握する概念として使用されている。とはいえ、小稿でも取り上げている麻生太吉などの実業家が国士館を支援することに関して、それが渋沢の「フィランソロピー」と如何なる共通点・差異があるのかといったことを明らかにするには、別途検討が必要となろう。

(58)「渋沢栄一宛栗野慎一郎書簡」(一九二六年五月二八日)、前掲『国士館百年史 史料編上』二六九～二七〇頁。

(59)「渋沢栄一宛大倉喜七郎書簡」(一九二六年三月二二日)、前掲『国士館百年史 史料編上』二六四頁。

(60)前掲『野田大塊伝』八六四頁。

(61)「授業科目(高等部)」(一九二四年七月)、前掲『国士館百年史 史料編上』一八二頁。有馬は大正期より農村問題に深い関心を有しており、福岡県出身ということもあって講師に招いたものと考えられる。旧藩主・有馬については、野島義敬「革新華族」の政治進出―有馬頼寧の総選挙立候補について―

『日本歴史』第七四九号、二〇一〇年)、同「大正・

昭和期における有馬頼寧と「旧藩地」人脈の形成」(『九州史学』第一五九号、二〇一一年)を参照。

(62)「大正二二年度事業計画覚」(一九二二年二月二四日)、前掲『国士館百年史 史料編上』二四八頁。

(63)前掲「国士館生諸君に(渋沢栄一講演記録)」、『国士館百年史 史料編上』二四三頁。

(64)「国士館附帯事業の計画」(『大民』第五卷第一号、一九一九年一〇月二〇日)、前掲『国士館百年史 史料編上』一四四頁。

(65)寄宿生と館宅居住の教員をもって組織される「国士村」は、各自平等に「村民」の資格を有し、「村長」は「村民」の互選によって定められ、各助役、図書部、弁論部、体育部の委員が学生のうちから村長の指名のもと選出されたという。山岸久雄「国士村生活」(『大民』第八卷第五号、一九二二年五月一日)、前掲『国士館百年史 史料編上』二〇八～二一六頁。

(66)「大学町」形成の研究として、木方十根『大学町』出現―近代都市計画の錬金術―(河出書房新社、二〇一〇年)、藤岡健太郎「近代の箱崎と博多湾―大学町の形成―」(『九州史学』第一八〇号、二〇一八年)など。

(67)「国士館の主義(柴田徳次郎述)〔抄〕」(一九二六年

十一月四日)、前掲『国士館百年史 史料編上』三七〇頁。

(68) そういう意味では、渋沢を過度に創生期国士館の功労者として位置付けるのは実態にそぐわないのかもしれない。

(69) 尚友倶楽部・伊藤隆編『有馬頼寧日記 第二卷』(山川出版社、一九九九年) 五三五頁、一九二七年一月二五日条。